

怪士あかし



面

おもて

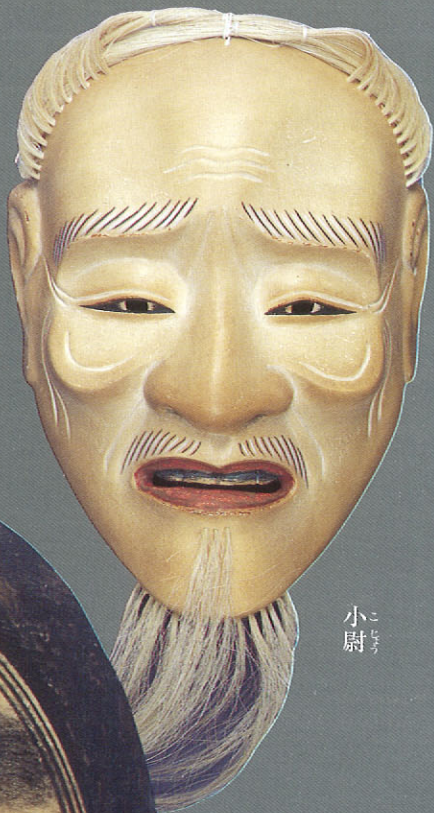
は、能にとって魂の宿り——。
私にとっては、ライフワークです。



●能面師——青木定夫さん



「平面的で作りがシンプルなものほど、難しいです。女面は、頬のふくらみが一ミリメートル低いだけで、表情が変わり、若さがなくなります。逆に、最初に取り組みやすいのも、凹凸が少ない女面。女面に入り、女面に戻るわけですね。」女面が能面の原点といえるそうです。
能は、この世とあの世の中間。幽霊界を演じる、まさに言葉にできない幽玄の世界。夢うつつに見る世界です。それだけに、面の果たす役目は大変なもの。
直面ひためんといって何もつけずに演じる曲もありますが、その時でさえ、演者は、表情で面を形造るといいます。顔は「面を掛けている」と考えるわけです。
能にとって「面とは、サムライでいえば刃。魂のようなもの。」と青木さんはいいます。
「舞台上、自分の作った面がどう見えるか、いちばんの楽しみですね。
舞台にかけてみないと、面の本当の良し悪しはわからない。面だけ見た場合と、舞台で見た場合は全く違いますから。写しを基本とする面づくりですが、裏ののみあとは、創作家として唯一オリジナリティを出せるところ。
京都の先生のところにある、まだ作っていない面を彫るときも、気持ちちは創作ですよ。面は私にとってライフワークですね。」
熊本ではよく行われる能舞台。もしかしたら、ひっそりとした武蔵塚の工房で作られた青木さんの面を、知らずに見ているのかも知れませんね。



小尉こざう



万姫まんぎ



姥おば

サクツサクツ。心地よい音が響いています。熊本市の武蔵塚のそばの静かな工房。木曾から取り寄せたひのきを彫っているのは、能面師、青木定夫さん、四十才。今作っているのは、二月十一日、県立劇場で演じられる「海女」の泥眼の面です。もとはといえば畑違いの食品会社にお勤めだったという青木さん。

十五年ほど前、能を見に行ったとき、知人の能楽師に頼まれて作った能面がきっかけで、本格的な能面づくりに取り組むようになったといいます。

「面は全部で約二百五十種類ほど。能面はもうすでに写しの時代で、ほとんどの面が江戸初期に完成され、創作は終わっています。

その面を寸分違わず写しとるのが、能面師の仕事。

もしその写しにオリジナルの要素を加えれば、それはもう能面ではなく仮面だといわれます。

木目にたまされる、よいですが、なかなか思ったようにはいきません。」

面づくりは、最初の木取りから、彫り、塗りはもちろん、板金や髭付けまで、十五種類ほどの異なる工程を一人でこなさなければなりません。大変な根気のいる仕事です。